

70億人が研究者—2016年度実践研究フォーラムに参加して—

樫 佳世

「70億人が研究者」これは、日本語教育学会実践研究フォーラムの最後のパネルディスカッションでパネリストの一人である細川英雄氏が発した一言だ。この一言で、いままで「研究」という「神々しかった」2文字が、急に私の目の前にストンツと落ちてきた。つまり、細川氏は、「生きている人すべてが、実践研究者である」という意味で使ったようだ。会場には、笑いがおき、その後も発話者が、「70万年」「70人」などと、細川氏の言葉を間違えて引用するくらい、それは衝撃的なものだったようだ。私はといえば、なんだか「研究」する「権利」を急に「もらえた」ようで、とてもうれしくなった。いままで「研究」と言えば、難しい言葉を使い、ある特殊な人の領域でしか行われていない、特権のようだった。「平民」は、その難しそうな「研究」をありがたがって拝聴するだけだったような気がする。しかし、今日の細川氏の言葉で「平民」にも「権利」が与えられたのである。歴史的な瞬間だ。しかしそれは、同時に権利を持つことができたのだから、いつでも、どこでも「研究」できるんだよというささやきでもあるように聞こえた。

「研究」という言葉を難しいと捉えるのは、私だけではない。以前、日本語学校の同僚をこのフォーラムに誘った際、「私、そういう難しいことを話す研究会に行っても意味がわからないから」と言って断られたことがある。そんな彼女たちにこそ、今日のパネルディスカッションを聞いてほしかった。そして、日々の授業準備にまっしぐらな先生たちにこそ「実践研究」について話してもらいたいし、一緒に考えてみたい。なぜなら、そこに潜んでいる「ことば」こそ、「生(なま)」の「研究」であり、彼女たちも70億人の研究者のうちの1人だからだ。

パネルディスカッションは、とても楽しかった。私が特に印象的だったのは、細川氏の、『『じゅうそうてき』にことばの活動を』というフレーズだ。「ジュウソウテキ？」という文字が私の頭の中を回転した。私がイメージする重層的といえ、大好きなミルフィーユだ。あれは、重層的でとてもおいしい。なぜおいしいか。つまり、なぜ重層的がいいのか。答えは、簡単だ。一層一層丁寧に積み重ねているからだ。そして、その一層一層が違う味を持っているからだ。細川氏の「ことばの活動」は、「ミルフィーユなんだ」と私の中で結論づけた。

私にとっての「ことばの活動」は理解である。他者を知りたいと思う活動である。なぜ彼は、教科書を持って来ないのか。なぜ、彼は私と話すとき貧乏ゆすりをするのか。「彼」とは私の学生である。私は、彼を知りたいと思った。なぜなら、彼は私のテスト用紙に「日本に来たことを後悔している。大学にいけるかな」と書いてくれたからだ。彼は、私のことばに「1つ」積み重ねようとしている気がした。もしかして、細川氏の「重層的」は、1人ですることかもしれない。だが私は、他者との対話を重層的にしたいと思う。それは、ミルフィーユのパイ生地の上に不均衡ないちごを置き、それをクリームでゆっくりと固定し、さらにその上にパイ生地を注意深く置く作業に似ている。彼のことばは、時に不均衡で、クリームが多すぎれば、はみ出してしまう。それでも、一層一層丁寧に積み重ねたことで、ミルフィーユと同じくらい甘い思い出を、彼は私にくれた。これは、「成功例」。ミルフィーユが積み重なっても倒れてしまうことだってある。だからこそ細川氏は、「複数、継続的にことばの活動を」と付け加えたのかもしれない。

実践研究フォーラムに参加して、「70億人の研究者」が仲間であると勇気もらった。

(はじ かよ：東京学芸大学大学院生)

「70億人の実践研究者」について海辺で考えたこと

高橋 聡

きょうはウクレレを持って海に来ています。

波の音とこの小さな楽器の音色がこんなにも緩やかな世界を創るのかと今更ながら驚きます。

こうしていると、ここ最近のぼく的生活や人生についての新たな思いがぼんやりと生まれてきます。

ことばは生きる営みとしてあるのですから、実践は生きるという実践であり、実践研究はよりよく生きるための営み、他者との重層的な関係の過程として創出されるものということを、ぼくはこの海とウクレレと同じくらい、そのまま受け容れています。

生きるための幸せ追求の各論は、それこそ70億分+その関係性分だけあって、なぜ、何のために、誰とどのように関係を創っていくのかによってそれぞれの具体的な方法論は違います。個々の、よりよく生きるための方法論を主張しあっても埒があきません。いわゆる研究者として生きる喜びを追究していくのであれば、その関係性における言説、所作を用いるでしょうし、猫との喜びを深めていきたいのならば、猫族のあの摩訶不思議な世界に足を踏み入れなければなりません。それぞれの立場から方法論を熱心に語るのは結構ですが、あくまで自身がよりよく生きようとしている営みとしてそれが生まれていることは忘れてはならないように思います。

日本語教育、そして今回は実践研究、生きる実践が置き去りにされた方法論の応酬に窮屈さを感じますが、そこに対話の重要性が云々されると少々辟易してしまいます。対話はまさにことばによって対等に対することで何かを生み出そうとするもので、そのためには、強固な自分の立場をいちど相対化することが必要になるように思います。各立場から、その方法論を対話風に主張していても、何も生まれてきません。いわゆる研究者という立場、日本語教育を外に発信しなければならないとする立場、猫になってしまいたいと思う私、そうしたいろいろな私たちが対話するためには、よりよく生きようとしている者としての、対等な関係に一端立ち返らないといけないように思います。今、ここでの自分が何によって生じているかに自覚的になるということでしょうか。70億人の実践研究者という発想は、この対等性を保障するという点で、大切な意味があると感じます。

こうして、ぼく的生活から一度離れて外に出てみると、ぼくがぼくの立場を守るためにいかに汲々としていたかに思い至ります。このところ、しらすが上がらず、本日生しらすはないとのこと、少々がっかりしましたが、しらすのかき揚げもとても美味しいものでした。もうしばらくウクレレを弾きながら、サーファーたちを眺めて、浜沿いに歩いて駅へ向かいます。

またメールいたします。ありがとうございました。

(たかはし さとし：早稲田大学日本語教育研究センター非常勤講師)